

日本古典文学大辞典

第六卷



索引

日本古典文学大辞典

第六卷

岩波書店

日本古典文学大辞典 第六卷

第六回配本(全六卷)

一九八五年二月二〇日 第一刷発行

定価 一三〇〇〇円

編集者

日本古典文学大辞典
編集委員会

発行者

緑川 亨

発行所

〒100 東京都千代田区一ツ橋二、五、五
株式会社 岩波書店

電話 〇三(三)六五二
振替 東京六(二)六二〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

第六卷

索引

も

盲安杖 一巻。仏教。鈴木正三

【著】元和五年(六二九)大阪城にあって同朋のために書いたといわれる正三の処女作。慶安四年(六五二)刊。【内容】心の闇を助けて安きに導く杖の意の「盲安杖」を書名として、仏法を以て我が悪心に眼をひらかせようというもの。「生死を知て楽み有事」以下、十条より成る処世訓で、仏道の立場より説くのが特色。平易な叙述と譬喩が巧みであり、各条の終りに古人の句もしくは和歌を付して、文学的効果を高めている。【諸本】初版以後幾度も版を重ね、安永七年(一七九八)には手島堵庵が序を加えている。【翻刻】鈴木正三道人全集。日本古典文学大系(仮名法語集)。〔柳田聖山〕

望 一 俳人。杉木氏。望都・茂都

とも記し、「もいち(も)つ」とも訓む。伊勢山田の人。一志久保町住か。盲人で勾当の官を得た。伊勢神宮神楽職一口頭正春の長男として生まれたが、父の跡は四男正友が継いだ。『代睡漫抄』所収杉木望一三十三回忌追善千句追加の息正香の跋によれば、寛永二十年(一六四三)十一月四日没、五十八歳。辞世「世を去ばたゞ冬山のかたち哉」。【家系】杉木家は、伊勢神宮神楽職

と師職の家柄で、家格は低いが、文芸愛好の気風の強い一族だったようである。祖父政継は連歌師と伝えられ、一族の多くが俳諧を嗜み、なかでも弟正友と再従妹美津(光貞妻)は著名である。ほかに和歌や連歌を好んだ者もあり、美津の息光敬は、普斎と号して茶道に名を成した。【事蹟】伊勢において俳諧は、古くから神宮神官の連歌の余興として行われていたが、近世初期には神官より身分の低い師職層を中心に広く浸透し、隆盛を誇った。望一は、松田利清と並んでその最も有力な指導者であり、多くの門弟を擁し、生前は尾張や三河方面にまで名声が伝わっていた。死後も、貞門初期の有力俳人として、長く名をとどめている。貞徳に批点を乞うたことが、『久流留』や『紅梅千句』の跋などに述べられているが、師弟関係ではない。伊勢の人として守武を仰慕していたことが、『望一千句』の序によつて知られる。重頼と親交があり、『犬子集(幼誌)』編纂に際しては、守武以来の句を集めた発句帳を提供し、多数の伊勢俳人と共に入集して伊勢俳諧の名を高めた。その発句帳の別本が、没後、伊勢俳諧大発句帳抜書として刊行されている。〔杉木望一三十三回忌追善千句追加跋によれば、正友編として伝わる付句集『伊勢俳諧集』という式目書も著していたという。著作に前述の『望一千句』と『望一後千句』があるが、共に死後の出版である。〔附録二六一〕

〔越智美登子〕

望一千句 一冊。俳諧。杉木望

一作。自序。慶安二年(一六五二)伊勢山田版。望一七回忌追善の記念出版であろう。成立

は寛永初年(一六四四)頃か。【内容】序に「荒木田の鷹の飛跡をしたひ、守武朝臣此道の千句初て仕たまひしかば、其声を伝へ聞、われもとてすほん／＼」と述べ、『守武千句』の跡を追ったものであることをいう。しかし、式目や作風の上で『守武千句』に追随したとみられる点は、ほとんどないと言つてよい。『守武千句』では、式目について相当自由な立場をとっているが、本書では、貞門風俳諧の一般的な規定は、ほぼ守られている。方法面でも、『守武千句』において顕著に見出される、いわゆる守武流の無心所着や前句付的な句は、ほとんどない。同じく「懸詞」や「あしらひ」を多用しても平(ひ)くして／＼高野聖のきたるかさきぎ」のように、観念の急激な転換をめざし、えそらごとの超現実世界を作りあげることが多いのにくらべ、「霞の関もやぶれたる道／＼武蔵野やうら／＼に雨のふるわらち」の如く、句中に溶け込んで不自然を感じさせない貞門風の用法がなされている。一句の独立性に留意し、穏やかな句姿の親句によつて付け運んでゆく本書の方法は、貞門風俳諧の志向するところと軌を一にしており、『守武千句』を念頭に置いていたとしても、それは千句という形式だけのことであろう。全体としては、取成(ひ)付によつて句境の変化を図りつつも、平易な連想による緊密な付合が多く、なだらかな反面や変化に乏しい感がある。【付記】本書に続いて、本多検校の命によつて詠じたという『望一後千句』が慶安五年に出版されている。後、寛文七年(一六六七)に野田弥兵衛方より本書と『後千句』が二冊揃いで開版された際、本書は『望一前千句』と改題された。

【翻刻】近世俳諧資料集成1。

〔越智美登子〕

蒙求 三巻。漢籍。子部・雜家

類。唐の李翰編。七四六年(唐の天宝五年)の李良(陸善経代作)の「薦蒙求表」、李華の序を付す。編者は安平の人。唐王朝の一族であるが、官は司馬倉參軍にとどまった。書名は「易経」の「童蒙我以求む」の句に由来して、兒童向けの書の意である。

【内容】太古から南北朝期までの古人の言行・事跡を、諷諭習得に便なるように、「王戎簡要・裴楷清通」の如く、四字句が対をなすように構成した韻文で示している。流布する徐注本では五九二句を所収する。対象は教訓性・歴史性のあるものを主として選んでいるが、その他、酷吏・殘虐・奸佞の類や、痴愚滑稽諷刺談、さては超現実的なものをも含め、権貴から任侠・布衣の徒まで、広く採用している。原撰は、これに簡単な自注を施したものと推測される。よつて、一種の説話集と見てよい。

【諸本】大別して二系統になる。その一は古注本で、自注本またはそれに近い、加筆・省筆のある類で、最も早い姿のものが見なされる。日本の宮内庁書陵部蔵本(寛政六年(一七九五)転写。上巻のみ)、真福寺蔵本(鎌倉期写。下巻のみ、ただし数葉を欠く)、敦煌出土本などがこれである。日本の中古・中世の文学作品と関係するのは、この系統のものである。その二は宋の徐子光が正史に基づいて詳注を施したもので、これを「補註蒙求」(宋の淳熙十六年(一一八六)序)といい、わが国で最も普及したのもこの徐注本である。近世以来、『蒙求』といえは専らこの徐注本を指し、この書の出現で

古注本は殆んど姿を消してしまった。それ故、日本文学と『蒙求』との関係は、新旧両注の存在を念頭において考える必要がある。なお、別に四言句のみを抽出したいわゆる標題本が存するが、日本の古鈔本にはこれに声点・字音(新漢音)が付けられており、これを棒読みしたので、傍聴者には鳥声のように聞え、それより「勸学院の雀は蒙求を囀る」の謔も生じたのであろう。また『千字文』胡曾詠史詩と合わせた『三注』の一冊として、明徳三年(三三三)の普門蔵書明徳目錄などにも見えて、広く読まれたことが知られる。

【影響】饒州刺史の李良の推薦などを得て、当時から広く行われ、『蒙求』の出現した唐の時代に既に続撰書『唐蒙求』が著されたが、以後このように『蒙求』の名を付した続撰書が続々と作られた。また、『蒙求』の名を付さなくても、同一体裁に倣うものも多かった。「蒙求」の名称を初学入門の書の代名詞とし、『蒙求』の名称を付した書も多く出た。かかる諸現象は日本においても同様であった。その他、『蒙求』は字書的作用をもつ類書にも調法がられて利用された。『白氏六帖』『事文類聚』『口機活法』等への引用がそれである。一方、その教訓性が買われて、後世の教訓書にも影響を与えた。元の『全相二十四孝詩選』(略称「二十四孝」)、朝鮮の『孝行録』『三綱行実凶』などの成立には、『蒙求』が大いに関与しているのである。その説話性は戯曲にも題材を豊富に提供し、それは元・明・清の各時代にわたっている。

【日本への伝来・影響】わが国に伝来した年代は明らかでないが、記録に見えるものは陽成天皇の元慶二年(八六二)に皇弟貞保親

王が受講したのが最初で、以後、幼学・教養の書として、親王をはじめ貴紳の子弟後には僧侶・武士の教養階級が盛んに学習した。その様子は、この書が日本へ帰化して、大影響を与えたと表現してよい。古鈔本の日本に存して残ったものも多い。楊守敏取得卷子改装本唐・宋間の写。上巻、真福寺蔵本(鎌倉期写。下巻)などは古注本。標題本では、保阪潤治蔵本(平安期)、正倉院蔵本(鎌倉初期)、東洋文庫岩崎文庫蔵本(鎌倉後期)、観智院蔵の建保六年(三三〇)・康永四年(三三三)の写本が古い。徐注本が何時日本に伝来したかは明らかでないが、足利学校に南宋の嘉熙三年(三三三)重刊本の写本(近世初期)があり、応安七年(三三三)には『重新点校附音増註蒙求』三巻が陳孟榮刻で既に刊行を見ている。その後は速い勢で、この徐注本が流行し、菅原章長や清原宣賢の講義もこれに拠り、宣賢には『蒙求聴塵』なる抄物が残る。その他の写本刊本の抄物類も、古活字本(文禄五年(一五九〇)小瀬道喜刊本や元和・寛永年間(一六五〇-一六八〇)刊本など)も、徐注本を使用している。近世に入ると、この徐注本を使用した、日本人による注釈書も出現した。早くは、宇都宮遼庵の『蒙求詳説』(天和三年(一六六三)刊)、毛利貞斎の『蒙求標題俚諺鈔』(宝永三年(一七〇六)刊)などが刊行され、最も広く行われたのは岡白駒箋注の『箋注蒙求』(明和四年(一七六七)初刷)であった。かくの如き状況を背景に、その影響は各方面に早くから現われた。文学では、『枕草子』『源氏物語』から『源平盛衰記』や謡曲など各ジャンルに及んでいる。中でも、鎌倉期の源光行の歌集である『蒙求和歌』は歌物語的形式をとり、『蒙求』からの説話を前文としたもの(二四一

首を数える。室町期の『漢故事和歌集』もこの流れである。韻文学との関わりでは、芭蕉・蕪村などにも求められる。しかし、芭蕉は『蒙求』などの中国故事を主観的に濾過して副次的に扱い、蕪村はこれを題材として客体化して詠んでいる。その教訓性を利用したものは、古くは『宝物集』『十訓抄』、降って近世にも多い。純粹な説話文学で『蒙求』から資料を得たものは、『今昔物語集』『注好選』『唐物語』『唐鏡』『三国伝記』『語園』等であり、中には翻案化されたものもある。近世に入っては、あらゆる小説形式や戯曲の類にも、そのまま、あるいは翻案されて、説話源となつてゐる。また、学問が漢学を指した時代では、『蒙求』は安易な知識源として、わが国の類書ないし和歌・文学参考書を大いに益した。『世俗諺文』『言泉』『枕集』『続歌林良材集』等がそれである。〔早川光三郎〕

【参考文献】桂湖村蒙求国字解(漢籍国字解全書)大正6年。○岡田正之『蒙求』(有朋堂漢文叢書)大正8年。○早川光三郎『蒙求』上(新釈漢文大系)昭和48年。

蒙求和歌(もうきゆうわ) 十四巻。和歌。鎌倉時代の詠史歌集。源光行作。元久元年(一二三〇)成立。『百詠和歌』および『楽府和歌』(散佚)とともに三部作をなす。一説に、將軍源実朝に献上されたものかという。【内容】平安朝以来の幼学書である唐の李瀚の『蒙求』からおよそ二五〇条の故事を抜き出し、これを春・夏・秋・冬・恋・祝・旅・閑居・懐旧・述懐・哀傷・管絃・酒・雜の十四部に分け

て和訳し、おののちに自詠の和歌一首を添えている。部立は『和漢朗詠集』に倣つたらしい独自のものである。真名序と仮名序を

冒頭に、藤原孝範の跋と光行の自跋、および両者唱和の詩と歌を巻末に添えている。【特色】説話の部分よりも和歌を一、二字下げて書くなど、歌集であるにもかかわらず説話に重点を置いてゐることが、形式面にも現われており、この時代の説話享受のあり方として注目される。説話に当る『蒙求』の注には、宋の徐子光による補注とそれ以前

の古注とがあるが、光行の拠つたのは古注である。『源氏物語』の注釈書『原中最秘抄』や延慶本『平家物語』に引用があるほか、『漢故事和歌集』の成立にも大きな役割を果たしている。【諸本】現存の伝本二十数本は三類に分類される。これを初稿本・精撰本・混合本とする説もあるが、説話数・歌数に大きな相違のあるほか、相互に記述内容や和歌などが全く異なる箇所などが多く、しかも、いづれにも後人による改変の手がかなり加わつてゐると見るべき点もあり、容易に結論を求めがたい。【翻刻】続群書類従15輯上。〔小島孝之〕

【参考文献】川瀬一馬『唐物語と蒙求和歌』(日本書誌学之研究)昭和18年。○池田利夫『日中比較文学の基礎研究』昭和49年。○同『新訂河内本源氏物語成立年譜』昭和55年。

蒙古襲来絵詞(もうこせらいえことば) 二巻。絵巻。宮内庁蔵。作者未詳。永仁元年(一二三三)頃成立。文永・弘安の二度の元寇に際して出陣した肥後国の御家人竹崎五郎兵衛尉季長の戦闘実録で、「竹崎季長絵詞」ともいう。【伝来】後巻巻末の付属文書によると、季長はこの戦功によって、肥後国海東郷の地頭職になったが、これは鎮守の甲佐大明神の神恩によるものであり、その報恩と、子孫へ戦功を伝えるために、永仁元年二月九

日

日

日

日

日

日に制作奉納したことがわかるが、永仁元年の改元は八月に行われていたので問題を残す。また、現存本は逸脱錯簡が多く、紙質・描法など異なつたものが混合している。で、原形形態についても問題を残す。現存本については、竹崎家の子孫から、宇土城主伯耆佐兵衛尉顕孝に伝わり、顕孝の娘が大矢野民部大夫種基と結婚するに際し大矢野家に移り、さらに宮内省に納入されて現在に至る。【内容】前巻は文永の役で、箱崎から出陣した季長がその日の大将少貳景資に謁したのち、赤坂方面に出撃、先駆をして鳥飼浜の塩屋の松の付近で敵と戦い、乗馬を射られ、鉄砲をうたれて苦戦するが、白石六郎通泰らが後陣から大勢をひきいて攻め寄せたので救われ、敵は龜原に退却したと描かれる。つづいて、この文永の合戦における恩賞申請のため季長が関東に下向して、御恩奉行秋田城介泰盛に認可され、御領拝領の下文と馬を賜わつたことが述べられ、その有様が描かれる。後巻は弘安の役で、負傷した河野六郎通有を見舞う場面からはじまり、菊池武房の護る石築地前を通つて出陣する季長、敵船に向つて出発する諸將の兵船、攻撃をかける敵船などが描かれるが、詞書の欠脱などにより、具体的にその戦闘の日時・場所は明らかにできない。【作風】「むま具足にせよ」と記入した所があり、人物の面貌も肖像性を志向して描かれている。特に甲冑と馬の描写はすばらしく、武家の好み

【参考文献】池内宏『三才の最新研究』(東洋文庫叢書)昭和6年。○荻野三七彦『蒙古襲来総論』に就いての疑と其解釈(『歴史地理』59の2、昭和7年2月)。○石井進『竹崎季長総論』の成立(『日本歴史』昭和46年2月)。○宮次男『蒙古襲来』昭和52年。○川添昭二『蒙古襲来研究史論』昭和52年。 【宮 次男】

【参考文獻】池内宏『三才の最新研究』(東洋文庫叢書)昭和6年。○荻野三七彦『蒙古襲来総論』に就いての疑と其解釈(『歴史地理』59の2、昭和7年2月)。○石井進『竹崎季長総論』の成立(『日本歴史』昭和46年2月)。○宮次男『蒙古襲来』昭和52年。○川添昭二『蒙古襲来研究史論』昭和52年。

【蒙齋隨筆】二卷一冊。隨筆。月田蒙齋著。文久二年(二二六三)自序。写本で伝わる。【内容】自序に、「博文約礼」を学の道と規定し、さて、読書講貫は博文の要、居敬存養は約礼の要であるが、学者は往々にして博文のみを知つて約礼の道を軽んずる故に入道積徳を為し難い。そこで著者は居敬を重んじてその体認するところを割記したものが本書であると記す。以下本文は、天保七、八年(二二六七)頃から安政五年(二二六四)に至る間、年次を踏んで、交友や黙想の間に体認する跡を直截に記している。例えば「苟能有養則不衣而暖、不食而飽、常如在春風中(座也)」「君子集義、小人集利」など。【著者略伝】月田蒙齋は、名は強、肥後玉名郡の人。辛島塩井や千手旭山に学び、のち熊本藩儒となる。慶応二年(二二六六)七月没、六十歳。幕末九州崎門学の重鎮である。【翻刻】『蒙齋隨筆』(楠本碩水編、明治26年。巻末に文中人物略伝を付す)、『蒙齋隨筆』(岡直養(楠本碩水門人)校正、大正7年、漢口日報社。上掲書の重刊)。(中野三敏)

【蒙齋先生文集】『勿辭樓文集』(中野三敏) ↓ 勿辭樓文集(中野三敏)

【孟 子】七編(各編が上・下に分れて十四編ともなる)。漢籍。経部・四書類。中

国戦国時代の孟軻(孟子)著。儒教の經典四書の一。 【成立】『孟子』には、孟子自身の記録もあろうが、おおむねは門人あるいはその後の人が孟子の言行を記録して編纂したものである。しかし内容はほぼ純粋で、孟子その人のものとして信用できる。漢の時代では十一編あつたらしいが、後漢の趙岐が注を加えて現在の形に定めた。 【内容】孟子の語録と問答を主とするが、文章はきびきびした弁論調の名文として古来有名である。孟子の思想をみるための典拠であるが、同時に前四世紀末の戦国時代の様相をもうかがわせる興味深い内容に満ちている。孟子の思想は、孔子の仁の思想をうけて仁義説を唱え、その基礎づけとして性善思想を説き、仁義にもとづく王道政治を強調したものである。孔子の仁は肉親の情をひろく社会に及ぼすもので、実践上では親近なものから疎遠なものへという序列があつた。孟子はその現実的な差別に感じて適切な態度をとるべき基準を義と呼んで強調し、理想的な仁徳の達成を助けるものとした。仁、義の併唱がここに始まり、仁の実践方法がはつきりするとともに実践道徳としてのきびきびさが生まれることになった。性善説は、この仁心が人間本性として誰にも備わっていることを強調して、人々の道徳への意欲をげましたものであつた。しかもその善性の実現は天の意志でもあるとして、そこから仁義説の正当性と權威性を訴えた。王道政治はこの仁心にもとづいて民衆への愛を主とし、その経済生活を保証したうえで道徳教育を行うべきであつて、不仁な君主は追放してよいとまで主張

した。孟子の思想は、当時の反儒家的な楊朱や墨翟の思想に對抗して、儒教の教説を道徳思想、政治思想として整備したところに意義があつたが、反面、本性や天を強調することで観念論的な傾向も強くなった。 【著者略伝】著者とされる孟子(前三七二? - 前二九六?)は、姓が孟、名は軻。字は子輿または子車といわれるが確かでない。現在の山東省鄒県にあつた鄒に生まれ、孔子の孫の子思の門人に儒教を学んだ。幼時の孟母三遷の教えは伝説として有名である。諸子百家の一人として戦国諸侯のあいだを遊説したが、その活躍期は前三二〇年ごろから十五年ほどである。しかし、諸侯の求める現実的な富国強兵策よりは、理想的な道徳主義の鼓吹を主としたため、実情にうといとして敬遠され、晩年は郷里に隠退して門人の教育に専念した。 【伝承】孔子の思想をうけつづき孟子の著として儒教の正統思想とみなされ、儒教のことを「孔孟の教」とよび、『論語』と並んで「論孟」といつて尊重されるようになったが、もとは「荀子」などと並ぶ諸子の書物にすぎなかつた。唐の韓退之が顕彰し、宋の朱子学で四書の一つとされてから儒学の重要な經典となり、また文章の模範ともされるようになって、朱子学の盛行とともに必読の書となつた。しかし、時にはその革命是認の主張が危険思想とみなされて警戒もされた。明の太祖が不都合な文を削除させたのはその一例である。日本でも、『孟子』の書物を積んで来る船は沈没するという風説さえ、『五雜俎』には見えている。また、清原家の禁裡における講義では革命思想のところなど不都合なところが省かれた。 【日本への伝来・影響】『学令』の教材の中に

見えない『孟子』の伝来時期は明らかでないが、平安初期の『日本国見在書目録』には趙岐注本と陸善経注本が登載され、平安末期の『通憲人道藏書目録』には『新校孟子経』、藤原頼長の『台記』には宋の孫奭(註)の『孟子音義』の名が見える。古鈔本の残るものは、鎌倉期以後で、長寛二年(二六四)点の本によって校点した『群書治要』巻二十七にある抜粹(金沢文庫蔵)、天授四年(二三六)から同六年にかけての点のある朱熹注本七冊(宮内庁書陵部蔵)、南北朝期末の中原家の訓のある趙岐注本七冊(慶応義塾大学斯道文庫蔵など)がある。天授鈔本に見る如く早くも新注本が行われたのである。『普門藏書明德目録』にも『直解孟子』が載るが、趙岐注系と共に行われたのであろう。南北朝期刊の底本は『音注孟子』(漢の趙岐注、宋の孫奭音義)であり、古活字版の慶長四年(一五七)の勅版や慶長年中の諸本(正運刊本・下村生刊本その他)はみな趙岐注本であった。一方、『孟子集註』(宋の朱熹撰)、『孟子輯釈』(元の倪士毅撰)、『四書章句纂釈』(元の程復心撰)の元版なども中世に伝来して残存する。抄物には、清原宣賢とその系統の『孟子抄』その他の写本・刊本がある。江戸時代の初めは、朱子学の全盛期で、『論語』などと合せて四書の一つとして、新注系の本が刊行された。したがって、朱子学中心の江戸期の儒学界では、幕末に至るまで広く読まれたのであるが、反朱子学の派ではその受容の態度は様々であった。『論語』の義疏の書と見て重視した伊藤仁斎には、当時から評価を得た『孟子古義』(享保五年(一七二二)刊)があるが、徂徠学派や古注学の人々は『孟子』を重視しなかった。注目すべき注釈には、皆川淇園の『孟

子釋解』(寛政九年(一七九七)刊)、中井履軒の『孟子逢原』(写本)、西島蘭溪の『論孟叢鈔』(文化十四年(一七五九)成)、大田錦城の『孟子精蘊』(写本)、佐藤一斎の『孟子欄外書』(写本)などがあるが、幕末になるに従って、折衷的・科学的な注釈態度のものとなつていく。『孟子』は思想的な影響以外にも、名文としての文学上への影響も大きく、「五十歩百歩」木に縁りて魚を求む「曰わく言い難し」などの多くの有名な慣用語を伝えている。↓論語 (金谷 治)

【参考文献】小井勝人『孟子』(岩波文庫)昭和43・47年。○金谷治『孟子』昭和41年。○井上順理『本邦中世における孟子受容史の研究』昭和47年。

毛詩 ↓詩経(一五)

下り、以後二十年余り流浪の生活を続ける。都に落着くようになったのは四十九歳の弘治元年(一五五〇)のこと、その年の閏十月二十七日から叔父三条西公条の『源氏物語』の講釈を聴聞するようになる。途中植通自身の事情によって中断はしたが、五十四歳の永祿三年(一五九〇)十一月五日には全巻を読了することができた。六日後の十一日には、植通の主催によって和歌・連歌による盛大な宴が催された(源氏物語宴記)。序文で「入道前右大臣の講談を聴聞」とし、また奥書にも「陪翁之講筵」とあるのは、右の公条による講釈を指している。植通はその講釈を聴聞しながら、聞書ノートを作成し、その後、『河海抄』『花鳥余情』のほか、『弄花抄』の説なども吸収して二十巻からなる『孟津抄』を作成したのである。奥書では「後数十年」とするが、実際には永祿三年以後十五年目のことである。ただ、伝本によつては「此源氏物語抄は九条禪閣御聞書也。道遥院殿美隆称名院殿公条御両所へ数年御心をつくされ尋問給と云々」と説明が加えられるので、奥書の「曩昔、陪翁之講筵」とは祖父三条西実隆を指しているのかも知れない。『孟津抄』を作り終えた天正三年は、実隆が没して三十九年目の年であり、植通自身すでに六十九歳になっていた。【内容】初めに自序があり、続いて「物語の時代」「准拠」「伝本」「紫式部」などに關する料簡が付され、その後巻別による注釈が展開する。『河海抄』『花鳥余情』などの古注とともに、三条西家の源氏学も大幅に取り入れたようである。当時の注釈書に共通して見える説なども指摘できる。そのほか各所に「入道右府云」「入道右府の講釈に」「称名院入道右府の今案のよし被講者也」など

五津抄 しょうしん 二十冊。注釈。九条植通(註)著。「孟津集」とする伝本もあるほか、植通が九条禪閣と呼ばれたことから、殿抄(聞源抄)の書名で引用される例も見いだされる。奥書に「時天正第三乙亥、初秋星節、暮齡八八五歳、陶化翁誌焉」とあり、天正三年(一五五七)七月七日の成立と知られる。【成立事情】序文に「しらまほしさに入道前右大臣(三条西公条)の講談を聴聞せしに、河海抄・花鳥余情の意趣、当流の義理に、或は相当し、或は不叶ことなどを取捨の旨に、弄花抄の専要を書くはへて、其上に猶いぶかしきことを再問し侍私と付侍るなり」とし、奥書にもほぼ同趣旨のことを記している。植通は二十八歳の天文三年(一五五四)に関白内大臣を辞して大阪に

とする、公条の講釈を聴聞してノートを作成していた事実を示すことばも見いだせる。また「元龜三年(一五八四)王申春天之比、三条西相実澄依被相語、則同愚意而載抄斯者也(料簡)」「天正二甲戌春ノ比大納言実澄に此物語の所見并同詞のかはりたる心もちみ、双子の体用ノ義などを不審に思し事共を問侍れば(須磨)など」とあるのを見ると、公条の没後は三条西実枝(実澄)に折々不審を尋ね、その注記などを自作の注釈書に書き込んでいたと知られる。さらにこれらの諸注を勘案した上で、植通は自説を「私」として挿入していった。そこには公条説を継承しながらも、より詳細に読みとらうとする植通独自の、鑑賞批評的な解釈をみることが出来る。【諸本】草稿本と清書本の二系統に分類され、前者には伝植通筆天理図書館本(三冊残欠)が想定されているが、注記内容としてはほとんど交らない。奥書では「二十巻」とするが、天理本は十五冊本だったようだし、他に二十一冊本・五十四冊本も存在する。序文・料簡・奥書も、伝本によつては持たない。宮内庁書陵部本・内閣文庫本・陽明文庫本その他いづれも写本。【翻刻】源氏物語古注集成。(伊井春樹)

毛端私珍抄 ちゆうしんしん 一冊。能。金春禪鳳(註)著。無題ながら、「毛端私珍抄」と名付ける旨の序を持つ。別に同種の三冊があり、「反古裏の書」(一・二・三)と仮題する。元来一括して伝来したらしく、元和七年(一七三二)金春重勝宛書物之日記に「反古の裏に書たる横綴、五括り」とあるのに該当する書。【内容】序に、子孫のために残し置く目的を述べ、物まね・音曲・舞につい

毛端私珍抄 ちゆうしんしん 一冊。能。金春禪鳳(註)著。無題ながら、「毛端私珍抄」と名付ける旨の序を持つ。別に同種の三冊があり、「反古裏の書」(一・二・三)と仮題する。元来一括して伝来したらしく、元和七年(一七三二)金春重勝宛書物之日記に「反古の裏に書たる横綴、五括り」とあるのに該当する書。【内容】序に、子孫のために残し置く目的を述べ、物まね・音曲・舞につい

とす、公条の講釈を聴聞してノートを作成していた事実を示すことばも見いだせる。また「元龜三年(一五八四)王申春天之比、三条西相実澄依被相語、則同愚意而載抄斯者也(料簡)」「天正二甲戌春ノ比大納言実澄に此物語の所見并同詞のかはりたる心もちみ、双子の体用ノ義などを不審に思し事共を問侍れば(須磨)など」とあるのを見ると、公条の没後は三条西実枝(実澄)に折々不審を尋ね、その注記などを自作の注釈書に書き込んでいたと知られる。さらにこれらの諸注を勘案した上で、植通は自説を「私」として挿入していった。そこには公条説を継承しながらも、より詳細に読みとらうとする植通独自の、鑑賞批評的な解釈をみることが出来る。【諸本】草稿本と清書本の二系統に分類され、前者には伝植通筆天理図書館本(三冊残欠)が想定されているが、注記内容としてはほとんど交らない。奥書では「二十巻」とするが、天理本は十五冊本だったようだし、他に二十一冊本・五十四冊本も存在する。序文・料簡・奥書も、伝本によつては持たない。宮内庁書陵部本・内閣文庫本・陽明文庫本その他いづれも写本。【翻刻】源氏物語古注集成。(伊井春樹)

とす、公条の講釈を聴聞してノートを作成していた事実を示すことばも見いだせる。また「元龜三年(一五八四)王申春天之比、三条西相実澄依被相語、則同愚意而載抄斯者也(料簡)」「天正二甲戌春ノ比大納言実澄に此物語の所見并同詞のかはりたる心もちみ、双子の体用ノ義などを不審に思し事共を問侍れば(須磨)など」とあるのを見ると、公条の没後は三条西実枝(実澄)に折々不審を尋ね、その注記などを自作の注釈書に書き込んでいたと知られる。さらにこれらの諸注を勘案した上で、植通は自説を「私」として挿入していった。そこには公条説を継承しながらも、より詳細に読みとらうとする植通独自の、鑑賞批評的な解釈をみることが出来る。【諸本】草稿本と清書本の二系統に分類され、前者には伝植通筆天理図書館本(三冊残欠)が想定されているが、注記内容としてはほとんど交らない。奥書では「二十巻」とするが、天理本は十五冊本だったようだし、他に二十一冊本・五十四冊本も存在する。序文・料簡・奥書も、伝本によつては持たない。宮内庁書陵部本・内閣文庫本・陽明文庫本その他いづれも写本。【翻刻】源氏物語古注集成。(伊井春樹)

とす、公条の講釈を聴聞してノートを作成していた事実を示すことばも見いだせる。また「元龜三年(一五八四)王申春天之比、三条西相実澄依被相語、則同愚意而載抄斯者也(料簡)」「天正二甲戌春ノ比大納言実澄に此物語の所見并同詞のかはりたる心もちみ、双子の体用ノ義などを不審に思し事共を問侍れば(須磨)など」とあるのを見ると、公条の没後は三条西実枝(実澄)に折々不審を尋ね、その注記などを自作の注釈書に書き込んでいたと知られる。さらにこれらの諸注を勘案した上で、植通は自説を「私」として挿入していった。そこには公条説を継承しながらも、より詳細に読みとらうとする植通独自の、鑑賞批評的な解釈をみることが出来る。【諸本】草稿本と清書本の二系統に分類され、前者には伝植通筆天理図書館本(三冊残欠)が想定されているが、注記内容としてはほとんど交らない。奥書では「二十巻」とするが、天理本は十五冊本だったようだし、他に二十一冊本・五十四冊本も存在する。序文・料簡・奥書も、伝本によつては持たない。宮内庁書陵部本・内閣文庫本・陽明文庫本その他いづれも写本。【翻刻】源氏物語古注集成。(伊井春樹)

ての所説が示されている。また『反古裏(せうご)の書』は、全体として断片的かつ雑纂風記事を集めた未定稿の感が強いが、装束・道具類をはじめとする故実・作法関係記事や、能作論・音曲説等の比較的まとまった内容もあり、『毛端私珍抄』と一体となった禪鳳能楽論の中核をなすとともに、当時の能の実態を示す史料でもある。【諸本】法政大学能楽研究所蔵金春八左衛門本のみ。反古裏の横綴本からの転写本で、錯雑した内容は、底本が草稿本であるため、転写の際の何らかの処置が原因するかも知れない。【翻刻】『金春古伝書集成』(表章・伊藤正義、昭和44年)。【伊藤正義】

毛利千句(まうりせんく) 一冊。連歌。紹巴(せうぱ)・昌叱(しょうし)の両吟。別称「敵島千句」「巴叱両吟千句」。文禄三年(一五九三)五月十二日から十六日にかけて成る。加注本の奥書によると、毛利輝元が敵島奉納の万句連歌(毛利万句)の興行をしている頃、在洛中だった輝元のもとへ万句成就の報が届き、その供養のために紹巴・昌叱に命じて両吟させたものという。【内容】第一百韻は賦物初何で、発句は「世とともに花さきつがん若木哉(紹巴)」。この千句には作者の自注を付した伝本があり、穂久邇文庫蔵自筆本を含め古写本が多く、無注本より重要である。この注は、輝元の依頼によってめいめい白句にその作意を注記したもので、同月の下旬に成立している。【翻刻】『連歌古注釈の研究』(金子金治郎、昭和49年)。【奥田 勲】

毛利貞斎(まうりさださい) 江戸時代の儒学者。名は瑚珀、字は虚白、通称は香之進。貞斎

は号。生没年未詳。【事蹟】大阪の人で、『華雉隱儒』などと称して、京都に舌耕した(日本諸家人物誌)。延宝三年(一七二五)刊『書籍目録』に、すでに『古文後集詳解大全』『古文後集備考』『錦繡段増補抄』『九相持首書抄』『蒙求諺解頭書』『国花集改正』『国花集増補』『玉篇画引韻付』『三重韻訂補』『歌行詩三部首書』の編著者として名が見えるので、早くからの経書・字書など一般的な書物の注釈家であると知られるが、以後も著述に倦まず、享保十年(一七二九)刊『広類頤体俚諺鈔』に至るまで、少なくとも五十年以上活躍したことが知られる。代表的なのは、『増続大広益会玉篇大全』(十二冊)、『四書俚諺鈔』(十冊)、『莊子口義大成俚諺鈔』(二十一冊)、『古文後集俚諺鈔』(二十冊)、『四書集註俚諺鈔』(五十冊)、『新編類字箋解』(八巻十二冊)などである。また『通俗五代史軍談』など通俗物も作っており、総数は四十余点三百冊を越える。宇都宮遼庵(せうあん)と並称される代表的な著述家であった。【上野洋三】

毛利万句(まうりまんく) 連歌。毛利氏が敵島に奉納の万句三つ物。【内容】次の四点から成る。(一)永禄元年(一五九二)七月十八日就奉納一卷。初千句と第二千句第一発句欠。第三千句第一発句「あけぼの霞や浪の遠千濁(元春)」。(二)天正二十年(一五九二)二月輝元奉納一卷。初千句第一発句「けふ立つや四方にあまねき春の色(輝元卿代、元嘉)」。(三)文禄三年(一五九三)五月十一日輝元奉納一冊。初千句第一発句「梅は世の花の春しるはじめかな(輝元卿代、紹与)」。(四)慶長四年(一五九三)三月輝元奉納一冊。初千句第一発句「咲きそむる梅一もとや四方の春(輝元卿代、正允)」。

代、正允)。うち、(二)は征韓役戦勝祈念、(三)は同役終結報賽(金子金治郎説)。いずれも、毛利家武將、敵島祠宮、山口・出雲の連歌師の参加が見え、敵島連歌の盛大さを証している。【伝本】敵島神社宮司野坂家と(四)が、同館毛利家文庫に(二)と(四)がある。

【翻刻】『広島県史・古代中世資料編1』(一)のみ、野坂家本。【湯之上早苗】
【参考文献】金子金治郎『敵島の連歌』(芸備地方史研究)2の6、昭和29年12月。

毛利元就(まうりげんすけ) 和歌・連歌作者。戦国時代の武將。大江氏。弘元の子。元龜二年(一五〇二)没、七十五歳。【事蹟】安芸を中心し、周防・長門等を領有し、中国地方の大部分を支配するに至る。文事を好んだが、武家としては武道がまず肝要であり、文事・芸能はその助けにすぎないと考えていたようである(先師御伝等)。作品も閑暇期か持久戦の折のものが多くいとされる。永禄元年(一五九二)七月十八日敵島神社へ「毛利万句」を奉納している。【作品】和歌・連歌の集に『贈従三位元就卿詠草(春霞集)』(私家集大成・中世V上、続群書類従16輯上所収)があり、その作風の概要が知られるが、儒教的な側面を持ちつつ、きわめて正統的な二条派歌風を示している。それは同集に跋を寄せている三条西実澄・紹巴や、親交のあった聖護院道澄らと同質ということができよう。【毛利元就教誠状』などの教訓状もある。

【参考文献】井上宗雄『中世歌壇史の研究』(室町後期)昭和47年。【奥田 勲】

毛利元就教誠状(まうりげんすけのまことしるし) 教訓。戦

国大名毛利元就が、弘治三年(一五五三)十一月二十五日、三人の妻子毛利隆元・吉川元春・小早川隆景に対して、毛利家の繁栄のため一致協力することをさとした書状。有名な「二本の矢の教訓」の実説版ともいえるべきもので、戦国の動乱のなかを生きぬいた老雄の感慨をもとに、きわめて具体的な教訓を与えている。元就は、同種の書状を多く息子に与えているが、いずれも大日本古文書『毛利家文書』に翻刻収録されている。【勝俣鎮夫】

最上の河路(さいじょうのこうじ) 飛鳥井雅有日記(ひとりのり) 二冊。俳諧。俱占・之建・千候編。享保五年(一七二〇)刊。京都野田小兵衛版。書名は巻頭の「出し初めて戦(いくさ)ぐ生絹(ぬい)」やもくうちは「(之建)の発句による。編者はいずれも、許六の道統を継いだ彦根の孟遠門に属する備中足守連衆で、享保三年冬から翌年暮春にかけての孟遠の来遊を記念して一集を編んだもの。【内容】諸家の発句を夏・秋・冬・春に類集、巻頭に孟遠一座の四十四(よんじゅうよん)巻末に孟遠に対する足守連中の饒別吟を収め、なお付録として孟遠より千候に与えた伝書「桃の杖」を添えている。蕉風衰退期に際し、野坡門に対抗した中国・九州地方に彦根蕉風勢力の扶植をはかった孟遠の活動ぶりをうかがい知るべき一集で、「桃の杖」は彦根系俳論資料として重視される。【尾形 仇】

黙雲詩稿(もくうんしこう) 一冊。漢詩。天隱竜沢(てんいんりゅうさく)作。「黙雲稿」とも。天隱の詩集には二系統ある。一はお茶の水図書館蔵實堂文庫所蔵本の系統で、七言絶句・七言律

詩・五言絶句・五言律詩・古詩を含み、最も量が多い。ほかに建仁寺兩足院所蔵本・内閣文庫所蔵本がある。一は七言絶句だけを収める系統で、統群書類従本・内閣文庫本(元禄三年(一六六〇)刊)がある。なお、天隱の詩は『花上集』や横川景三の『百人一首』に選ばれ、天文(一五三三)ころ如月寿印(天隱門下月舟春桂の法嗣)が抄した『中華若木詩抄』にも十三首入る。【翻刻】五山文学新集5。統群書類従13輯上。【今泉淑夫】木食上人(一五三三) ↓ 応其(一五三三)

黙識録 六卷。儒学。三宅尚齋著。正徳五年(一七三〇)自序。自序を記した五十四歳以降七十八歳までの劄記。書名は『論語』述而の黙而識之、学而不厭に由来。【内容】巻一・二「道体」、巻三・五「為学」、巻六「経伝」。「道体」は、前著『猿蓑録(一五三三)』を受けるもの、「為学」では、天理を尊奉するの志を立てて持敬存心、当然自然の理を窮め、天命を知り豁然貫通すべきであると説き、「経伝」では、中国の古典の内容や字義について、朱子学の立場から自己の意見を述べている。尚齋の存在論は始源過程共に理氣對待の弁証論であり、ただ理体太極を存在の根拠としてさし立てない点に朱子と些少の相違を示すが、これは山崎闇斎の影響である。しかし為学の法はほとんど朱子の居敬窮理論を継承する。【翻刻】日本倫理彙編7。【友枝龍太郎】

木師抄 一卷。雅楽。藤原孝道(一五三三)著か。鎌倉時代の琵琶の伝書。【内容】管絃の合奏・独奏の作法と心得、琵琶の持ち方、大法会舞楽の箏と琵琶、絃のかけ方、柱(こしら)の作り方、絃の繕り方などを具

体的に説いたもの。合奏は時と場所および他の奏者との調和などをよくよく考えねばならぬ事、琵琶も箏も基本は大きくしつかり弾くのがよく、年季が入って自然に技巧が身につく事、初心者はとめて音を下げ気味にすべき事等々、現代にも通じる演奏心得の数々が記されてある。絃や柱の作り方に關しては殊に詳しく、絃を繕る時の粥の作り方に至るまで微に入り細にわたって説明している。なお『殘夜抄』とほとんど同文の箇所がある。【翻刻】群書類従・管絃。【石田百合子】

薄層物語 一冊(写本)。仮名草子。作者未詳。成立は寛永十七年(一六四〇)以降天和三年(一六六三)以前。【梗概】將軍後見役桜川侍従の臣伊丹右京という美少年に、同輩の舟川采女が思いを寄せる。采女の念者志賀左馬之助の仲継ぎで二人は契るが、そこに新参者の細野主膳が現われ、右京に横恋慕をする。主膳は、侍従の近衆の茶道家節木松齋の手を借り、執拗に迫るが、右京は頑として聞き入れない。逆恨みをした主膳は、右京殺害を企てる。しかし、事は事前に発覚、右京の方から主膳を攻め、打ち果たしてしまふ。その科により、右京は浅草慶養寺で切腹と決まる。その場に采女も駆け付け、二人は共に切腹して果てる。【特色】寛永十七年に実際に起った男色刃傷事件を素材にしたもので、戸田茂睡の地誌『紫の一本』巻下にもこの事件の記事が見える。文章・趣向は古拙であるが、実録物のもつ迫真性を伝える。曲亭馬琴は『藻屑物語批評』(天理図書館蔵)の中で、「コノ頃マデハ、戦國ノ余風ナホウセズシテ、人オノノ勇敢ナリ。コ、ヲモテ女色ヲヌルシ

トシテ、男色ヲ欲ルナルベシ」と記している通り、この作品は近世初期の武士の気風を知る上で興味もたれ、文学史的には、近世男色物の先駆的作品として評価される。【影響】貞享四年(一六八七)刊の井原西鶴『男色大鑑』巻三中の「葉はきかぬ房杖」は、本書を改作したもので、要領を得た短編に仕立て直されている。また、天和三年刊の山本八左衛門『風流嵯峨紅葉』も本書に依拠したものだが、大幅に筋が改変されている。ほかに、元禄十一年(一六九六)刊『男色義理物語』が改作の意図をうかがわせるものとして掲げられる。ただし、本文の方は、異本程度の差異しか見出せない。この類のものに、『宵の雨』(一冊、京都大学図書館蔵)、『雨夜物語』等の写本がある。【諸本】大阪府立中之島図書館石崎文庫、神宮文庫他に写本が伝存。【翻刻】『もくづ物語』(明治29年、慶養寺版)。燕石十種。三十幅2(『雨夜物語』)。【尾上新太郎】

【参考文献】藤井乙男『江戸文学研究』大正10年。○平出鏡一郎『近古小説解題』(横山重・巨橋頼三編)『物語草子目録』前篇(昭和12年)。○野間光辰『西鶴五つの方法』(『西鶴新新放』昭和56年)。

木 鎮 連歌作者。生没年未詳。南北朝時代の人で、『菟玖波集』の撰進のために催された文和四年(一三三三)の『文和千句』に一坐し、『菟玖波集』にも十九句の入集をみ、救済を頭とする地下連歌師の中の代表的人物であった。『文和千句』は、前半の五百句のみが現存するが、木鎮は、十一人の連衆の中、第八番目に当る二十六句を出詠している。その句は、単なる知的技巧を抜け出し、句柄の深みへと移る当代の風を、

よく表わしている。【参考文献】金子金治郎『菟玖波集の研究』昭和40年。木工権頭為忠朝臣家百首(一三三三) ↓ 為忠家(一三三三) ↓ 書誌(一三三三) 木版本(一三三三) ↓ 書誌(一三三三)

目連記 六段。説経浄瑠璃。万治(一六六〇)ころ、京都八文字屋八左衛門刊。『松平大和守日記』万治四年二月十三日の条に「せつきやうのさうし」として挙げている『もくれん記』はこれか。【素材】『孟蘭盆経』による孟蘭盆会の施餓鬼の由来は、古くから語られ、読まれたが、享禄四年(一五三三)の写本『もくれんのさうし』はその代表作である。これと同じく、目連の救母と地獄巡りを主題とした語り物が説経でも行われ、それを人形劇にふさわしく段分けをし、戦鬨の場面を加える等改作したのが本作であろう。【梗概】初段―天竺からも国の大王子に二子があり、兄は継母の虐待を悲しみ、めのとあらどう丸に継母の美子である弟(後の目連)の殺害を命じ、かえって自らが弟の身代りとなる。二段目―大王は事実を知り、あらどう丸に討手向ける。あらどう丸夫婦は奮戦して死ぬ。三段目―大王の希望で、太子は書閣岬山(一三三三)の羅漢のもとで修行する。后は太子が高僧となり、自らは極楽浄土に至ると慢心して、鬼神の如く振舞う。しかし死去した后を、閻魔王はさんざん苦しめ、奈落に沈める。四段目―王子は母の死を夢に見、羅漢の許しを得て内裏にたどりつく。母の形見の衣に泣き悲しむ。五段目―王子(らばく尊者)は釈尊を頼み、檀特山に赴き、神通第一の尊者として目連と名付けられる。しかしその死

【参考文献】金子金治郎『菟玖波集の研究』昭和40年。木工権頭為忠朝臣家百首(一三三三) ↓ 為忠家(一三三三) ↓ 書誌(一三三三) 木版本(一三三三) ↓ 書誌(一三三三)

後冥途を遍歴して閻魔の前に至り、母に会うことを請う。六段目一許されて目連は八大地獄に案内される。猛火の中で苦しみ助けを求め母に会って、その弔いをするため再び娑婆に帰る。三月二十五日に冥途に赴き、四月八日によみがえった。目連は釈迦に母成仏の方法を尋ねた。その答えに「七月十五日に当って、十丈に床をかき、百味の飲食供えて、万灯笼をばし、施餓鬼といふ事始め、法華経転読するならば、速やかに地獄の苦しみ免れ成仏せん」と。【諸本】八文字屋版のほかに、天満八大夫正本「目連記」(外題「もくれんそんしゃ」、貞享四年(一六七)正月江戸鱗形屋刊)がある。【翻刻】説経正本集2。(室木弥太郎)

もくれんのさうし もくれん 一冊。御伽草子。「享祿四年(一五三)後五月二日」の奥書により、同年以前の成立。『芋蘭盆経』に由来する目連救母伝説の一つ。【梗概】目連尊者は天竺の拘尸那(くしな)国の太子として父母の寵愛を一身に集めていたが、出家に勝る功德なしと聞かされ、十二歳のとき出家する。十五歳のとき母は死んだが、そのあと修行につとめて二十七歳で十大弟子の一人とされ、遂には神通第一の目連尊者と崇められるに至った。ところが、三十七歳の三月二十五日に拘尸那城で仏事を営んだとき、突然に息が絶えた。冥途に赴いた目連が閻魔王の前に来ると、王は地獄で十七日の仏事を修するため招じ奉ったという。その仏事のあと、目連は出された御布施を辞退して母に逢わせてくれと懇請する。目連の孝心に感激した閻魔王は冥官に命じて、目連を母のいる黒繩地獄に案内させて、地獄の門を開くと、その瞬間に火が吹

き出して五千八百里も焼けたが、目連の衣は母の形見の袈裟のかかかっていないところだけが焼けた。獄卒が釜の中から炭のように黒い塊となった母を取り出す。母は「おまえが三界第一の知識として靈山(りやうざん)浄土の主になってほしいと願うあまり、大羅漢たちはみな死ねばよいと思つた憐愍の罪により私は地獄に墜ちた。この苦痛を免れるために『法華経』を書写してほしい」という。目連は四月一日の寅の刻に生きかえり、母のために八千人の羅漢に供養し、『法華経』を書写して仏事を行なったので、母は遂に地獄から救われた。なお、目連の焼けた衣は天竺から大唐に渡り、弘法大師がわが国に将来し、嵯峨天皇の手で比叡山の宝蔵に収められたが、のちに藤原頼通がこれを平等院に収めたので、三月三日に一切経会の行われるとき、拝観を許したという。【素材・趣向】わが国における目連救母伝説は、『芋蘭盆経』に基づいて、『三寶繪』以来、曹源寺本『餓鬼草紙』や『私聚百因縁集』などにおいて、いずれも母を餓鬼道から救出することになっている。これに対して、本作では目連は母を地獄から救出するのであるが、これは中国の俗文学の影響によるもので、唐代に属する敦煌の変文『大目乾連冥間救母変文』とか『浄土芋蘭盆経』などの系列に属する『目連救母経』が十四世紀後半にわが国に渡来し、『三國伝記』巻九の「目連尊者救母事」が書かれ、本作に至った。しかし、本作にはまた中国俗文学の系列の作品に見られないモチーフがあり、目連は一旦死んで地獄に赴くなど『日本靈異記』以来のわが国の地獄遍歴譚における説話構成に従っている。【諸本】天理図書館蔵写本のみ。【翻刻】室町時代物語

集2。『地獄めぐりの文学』(岩本裕、昭和54年)。(岩本裕) 【参考文献】岩本裕『もくれんのさうし』の背景(『文学』昭和51年9月)。

漢塩草 むしお 二十卷十冊。連歌。月村齋宗碩編の学書。永正十年(一五三)頃の成立か。連歌を詠む者のために古文獻中より語句を書き集めた書。書名もこれに因む。【内容】集録の語句は、天象・時節付方・地儀・山類水辺・居所・國付世界・草・木・鳥類・獸類・虫類・魚類・氣形付所作・人倫并異名・人事付所作・人事雑物并調度・衣類・食物・言詞の二十部に分類配列する。依拠した文獻は、『万葉集』以下の歌集、『伊勢』『大和』『源氏』を始めとする物語、『古事記』『日本書紀』『続日本紀』等の史書、『奥義抄』『繪語抄』『袖中抄』『八雲御抄』等の歌学書等、広範囲にわたっている。語句を掲げるに当たっては、出典名、説の典拠となった文獻名をも並記しつつ、その意味・用法を説く記事も多く、辞書の性格を有する。【諸本】国会図書館本内閣文庫本・京都大学図書館本・尊経閣文庫本等の写本のほか、寛永古活字本・寛文九年版本・同版の刊年不明本がある。【複製翻刻】『和歌藻』(室松岩雄編、明治44年)、『古活字版漢塩草』(室松編和歌藻しほ草)(京都大学国語国文学研究會編、昭和54年)、『漢塩草』(大阪俳文学研究会編、昭和54年)。(山口明穂) 【参考文献】安田章源語研究史における『漢塩草』の位置(『叙説』昭和54年10月)。

藻塩袋 もしお 五冊。俳諧注釈。米山翁(あやう)編。自序。雪中庵史登(しやうてい)跋。寛保三年(一七三)正月刊。江戸若菜屋小兵衛

版。【内容】芭蕉・素堂・其角・嵐雪ら故蕉門俳人を初め、露沾(るしん)・沾徳(しん)・老鼠(らうしゆ)・寥和(りやうわ)・紀逸(きいつ)・水語(すいご)ら江戸座を主とする俳人の発句に、詳細な注を加えたもの。見返しに「神儒仏医・詩歌文章・故事物類・物語雑談」と記すように、引用の文獻は和漢の各分野の典籍にわたり、原句の語積の範囲をはるかに越えている。掻書き集めるといふ意の書名から見ても、本書の主眼はこれらの引用部分にあるといつてよい。【諸本】宝曆四年(一七五)に求版本、文政五年(一八三)に改題本・発句注解俳諧故事談(『奇淵閣』が出版されている)。(加藤定彦)

文じ摺 ぶんじずり 一冊。雑俳。紙や玄水編。自序。享保十二年(一七三)正月刊。自家版。現存本は京都大学文学部蔵。【内容】序によれば、誹友十四五人がよりより前句を出して付句を集め、その勝句十番を諸社に奉納していたが、その勝句の刷物の版木を借りて、知人への年玉用にこの集を編んだという。前句一、冠一の勝句十句から成る陰刻刷の手軽な一枚刷を集めて冊に仕立てたもの。本書に合冊された逸題本のほか、姉妹編が二三あって、中には夕夕・丹舟等の名が見えるが、本書の点者は不詳。【特色】江戸の勝句刷の佛を伝えるものでは最も古い部に属する。また日々の夜会興行の様も偲ばせて興味深い。編者は紙屋を家職とし、各点者の会所をつとめた人物らしいが、本書の意匠も珍しい。楮紙袋綴の厚表紙を用い、表には草花模様、「文じ摺」の三字を、裏には自序を、墨を使わず字形絵柄を庄印し、わずかな凹みで判読させる趣向は、いかにも書名にふさわしく、その物数

寄は心にくい。【翻刻】未刊雜俳資料15期(前句冠付勝句集所収)。(宮田正信)

緞手摺昔木偶

五卷五冊

読本。柳亭種彦作、柳川重信画。文化十年(一八三三)江戸山崎屋平八刊。書名の緞手摺は、昔人形遣いの姿をすかして見せるために緞布を張った手摺(欄)の意。本作が多く近松門左衛門の淨瑠璃の趣向を借りた所から付した。古歌謡に残る人名を用い、遺孤を守る忠臣の苦節に、因縁の数奇と復讐談を絡ませた伝奇小説。【梗概】嘉心・承安(二六九二)の頃、出羽国月山の麓で付喪神(つくもがみ)の怪異を見せて出現した女仙赤魚(あかぎ)が、東国武士の娘小桜に、かの女が義のため戦死し、やがて産む娘は将来来ると予言する。小桜はその後京で源頼政の臣渡辺競(わたなべきょう)の妻六浦(むつ)となり、女子千鳥を儲ける。そして治承四年(一一八四)の頼政の挙兵に与し、宇治の敗戦に夫は討死、かの女は忠臣の黒丸に娘千鳥を託し、同族渡辺授(わたなべさづ)の一人子染丸との婚姻を依頼して自害する。立退く黒丸に、かれが討つた千寿太郎の一子、年少の水雄(みづお)丸が挑み、黒丸は成人した後日を約して去る。その夜、授の妻堅田が夫の跡を追い自害した宇治の橋姫宮の社前で、堅田を呪う行法姿の女と、逃れて来た黒丸と、来合わせた梵論字(ぼんろんじ)の三人が暗中で挑み合い、闇に紛れて別れた。十数年後、鎌倉の豪商富度(とみど)屋の後家雪吹(ゆきふ)は、再縁の入贅閑楽(いんざいけんがく)の連れ子の吉三に家を譲った。この店に段八・佐吾七の二名の手代があり、佐吾七は妹菫(すみ)と吉三の恋仲の縁で抱えられ、菫蒲(すみか)は閑楽夫妻の養女を迎えられていた。しかし吉三はなぜか親が奨める菫蒲との婚姻を

拒んだ。雪吹の甥で菫蒲に懸想する田子松に悪手代の段八は吉三を陥れるたくらみをすすめ、女非人水苔(みづかき)を語らい佐吾七兄妹に汚名を着せて吉三に追放させる。この頃同じ鎌倉に薫という名妓があり、真情を示す浪人水泡(なみだ)信太之助と契って一子信太(のぶ)を儲ける。しかし信太之助は身の重病をはかなみ、遺志を薫にほのめかして自害する。亡夫の墓参の帰途、薫は吉三と行き違つて惹かれ、吉三も段八の誘いで薫を愛慕し、繁(はる)かかの女に通う。度を過ぐす吉三の放蕩に雪吹は意見を加え、追放された佐吾七も旧主を案じて吉三の帰途に諫言するが、怒りを買つて打擲される。佐吾七は吉三をそそのかす佞者段八の殺害を図り、誤つて雪吹を刺す。この事件により吉三は父閑楽から勘当され、雪吹の計らいで請け出されていた薫と仇を求めて旅立つが、途中病を得、貧窮したため薫は大磯で二度の勤めに出、於香(おの)と名乗る。かの女の身請けを図る執拗な客が現れ、対策に窮した於香はこの客の殺害を図る。客実は佐吾七で自ら於香の竹槍を腹に刺し、来合させた吉三・菫蒲たちに雪吹殺しの自責の覚悟を述べる。吉三・佐吾七の分け持つ香宮の蓋と身の合致、そしてここに現れた閑楽の説明から吉三は渡辺授の子の染丸、菫蒲は千鳥、かの女の兄を装っていた佐吾七は忠臣黒丸、また閑楽は授の家臣で染丸を守り育てた坂門部(さかかたべ)破門一盛と、おのおの素性が判明し、蘇生していた雪吹も現れる。この時於香の幼兄信夫に信太之助の霊が憑き、信太之助実は水雄丸で、吉三の放蕩もその霊の所為で黒丸に仇を報じためと告げる。更に女非人水苔も現れ、かの女は授の側室で染丸(吉三)の実母、そして橋姫宮

で正室堅田を呪い殺した女と語り、その折の梵論字は閑楽と知れる。前非を悔いた水苔は自殺し、信太之助の霊は信夫の手を借りて黒丸を討ち成仏する。於香は請け出され、田子松・段八らは罰せられる。未知の許嫁への義理を重んじ、他女との婚姻を排斥していた吉三は、許嫁と判明した千鳥と結婚、信夫を養子とし、鎌倉殿から競・授の旧領の半ばを賜つて栄えた。【作風】趣向の大部分は近松の『淀鯉出世滝徳』に借り、原典の世話の世界に武士の義理と因縁話を導入し、筋を複雑ならしめている。部分的に浮世草子風の趣向も窺われる。作者独特の考証趣味が全般に濃厚。『松の葉』の小唄「さんやがへり」から富度の吉三を採り上げ、目次は編笠の名寄せ、各冊古画模倣の絵題笈を使用するなど趣向に凝る。文辭に未熟さがあるが、当時馬琴が『このすさみ』で指摘、しかし全体に首尾結構のまとまりよさを賞してもいい。演劇色が濃く浮上し、この特性がこの作以後作者を合巻制作へ転向専念させる。【諸本】初版本のほかに口絵・挿絵の重ね摺りを一部略した再摺本、さらに巻三の佐吾七諫言の図を省いた天保十二年(一八四一)江戸丁子屋平兵衛・大阪河内屋茂兵衛刊の後摺本がある。

【翻刻】『緞手摺昔木偶』(三世柳亭種彦校、明治十八年)。古今小説名著集18。袖珍名著文庫。帝國文庫『種彦傑作集』。近代日本文学大系『柳亭種彦集』。(鈴木重三)

餅酒歌合

狂言。協狂言。【梗概】都

の上頭(莊園領主)に年貢を納めに行く加賀の国の百姓と越前の国の百姓(シテ)が道連れになる。同じ御館(ごくわん)に着き、奏者の取次ぎで、加賀は実相坊の菊酒、越前は口鏡

(鏡餅)を納める。折しも歌会なので、年貢によそえ、去年(こぞ今年)を折入れて歌を詠めと言われ、加賀は「飲み臥せる酔(よ)のまぎれに年一打越(うちこ)酒の二年酔かな」、越前は「年の内に餅はつきけり一年の志を去年(こぞ)や食はん今年とや食はん」と詠み、万雑公事(諸課税)を免除される。喜びの余り大声をあげて咎められ、今度は大きな歌を詠めと命ぜられて、加賀は「盃は空と土との間(ま)のもの富士をつきずのはうにこそ飲め」、越前は「大空にはばかり程の餅もがな生けらう一期(いち)かぶり食(く)はん」と詠み、御酒を頂戴し、三段ノ舞を舞い、ワ力をあげ、めでたく舞つてガッシ留めで終る。【特色】祝儀物の餅・酒を納めること自体めでたく、構造が「三人夫(さんびと)」「松樫(まつかき)と共に百姓物の基本曲となっている。上掲の「飲み臥せる」年の内に」の歌は共に「餅酒歌合」に見えるもので、昔話などにも餅酒の比較話が散見する。永禄四年(一五七三)三月の「三好亭御成記」や「天正狂言本」に見える。【台本】大蔵流―虎明本・虎寛本(岩波文庫『能狂言』)、山本東本(日本古典文学大系『狂言集』)、和泉流―天理本・狂言集成。鷹流―保教本・賢通本(日本古典全書『狂言集』)。その他「狂言記・拾遺」(池田廣司)

【参考文献】北川忠彦『狂言の祝言性』(『文学・語学』昭和36年6月)。○金井清光『百姓物狂言の形成』(『能と狂言』昭和52年)。

餅酒歌合

狂言。協狂言。【梗概】都

の上頭(莊園領主)に年貢を納めに行く加賀の国の百姓と越前の国の百姓(シテ)が道連れになる。同じ御館(ごくわん)に着き、奏者の取次ぎで、加賀は実相坊の菊酒、越前は口鏡

歌合が催される。二条女房が判者で(関白良基と朱注があり、『六百番歌合』などのように女性を装う伝統に拠っている)、餅や酒に因む振(り)りや感慨・讚嘆・釈教等の狂歌が十番行われる。『万葉集』『古今集』後拾遺集を本歌取りし、『源氏物語』に本説を拠り、『保元物語』の源為義を折り込み、小野篁・祇陀太子等を例証に引く。【特色】中世には狂歌合が流行したが、「やさし」「心哀れ」等の判詞が述べられ、浄土教の説がふまえられており、有情を残した滑稽な面や、念仏会につれづれに開かれる点は、『東北院職人歌合』他の職人尺歌合の流を汲んでいる。また巻頭二首は狂言餅酒にもみられて両者の関係を示唆し、御伽草子『酒茶論』『酒飯論』等の上戸・下戸の争い物の系譜にも属している。【諸本】刈谷図書館蔵写本(『歌合集』所収)。宮内庁書陵部蔵桂宮本。【翻刻】桂宮本叢書17。

【参考文献】古川瑞昌『餅酒論の系譜』、『風俗』10、昭和46年8月)。

【秋谷 治】

【参考文献】古川瑞昌『餅酒論の系譜』、『風俗』10、昭和46年8月)。

辛くも制し、羯鼓を舞わせ、自分は獅子を舞い、睡気を催した望月を討ち取る。【素材・趣向】芸尽しを中心に、殺された武士の遺族と旧臣が芸能者に扮して敵討に成功することを描き、緊張感あふれる場面展開もたくみ。「放下僧(あき)」「藤栄(あき)」と同工。劇中舞の獅子は獅子を得意芸とした越前猿楽の工夫らしい。【翻刻】日本古典文学大系『謡曲集・下』。謡曲大観5。

【西野春雄】

望月長孝(もちつき) 江戸時代の歌人。名は初め長好・重公、のち長孝・兼友。水蛙とも号す。隠棲後、広沢隠士・小狭野屋(あき)翁などと号す。法号は道空。延宝九年(二六二)三月十五日没、六十三歳(過去帳)。京都下京裏寺町の宝蔵寺に葬ると伝えるが、元来の墓石は早く失われたらしい。【事蹟】信濃源氏で、祖父の代に京都に出て、室町に住して絹布を商い、富饒であったと云う。寛永八年(一六三三)十三歳で初めて和歌を詠み歌学に精進した。貞徳没の承応二年(一六五二)には三十五歳に達していたが、既に古今伝授以下の秘伝口訣の類をことごとく伝授されていた。すなわち年代の判明するものについて記せば、二十七歳(十八通之切紙)『諸君誦曲』、三十歳『伊勢物語之秘訣』、三十一歳『八雲神誦秘訣』、三十二歳『百人一首秘訣』、三十四歳『源氏物語極秘之趣』、『狭衣三箇秘訣』などである。これらの受伝に、おそらく家財を傾けたであろう。また宮廷歌壇との交渉もあり、飛鳥井雅章の指導を受けたが、門に到ればただちに奥の間に入るを許されたほどに重んじられたという。明暦四年(一六五八)、京都嵐山東の広沢池北西畔に数坪の小庵をつくり隠居、この年

四十歳であった。以後は晩年まで、詠歌の実作と古来の歌学の研究に倦むことなく、幾多の門人を養成した。長孝の没後は、その伝書類を多数継承した平間長雅と、『古今集仰恋』『長好師家集』などを伝えた唯元法師との二系統に分裂したらしいが、前者の系統が有賀長伯以下代々、近代にまで及んだ。【著作】長孝は貞徳から二条家流秘伝のことごとくを受けたと伝え、後年それらに自ら研究を加えるところもあつたらしいが、性謙退にして梓に鏤(あき)めることを好まなかつたと言ひ、事実自ら刊行したものは一つもない。著述は、晩年『古今集』を講義した折の記録『古今集仰恋』と、歌論書『歌道或問』、そして死の前年までの詠歌を自ら記録した『長好師家集』(上沢輯藻)が伝えられるばかりである。(生没)二六九二(一六二二)。

【上野洋三】

【参考文献】日下幸男『望月長孝年譜稿』地下一派の古今伝授(国文学論叢)26、昭和56年3月)。

持 政

連歌作者。浜名氏。兵庫助と称する。法号は法育。ただし浜名備中入道法育を持政の父または祖父とする説もある。生没年未詳。【事蹟】応永二十四年(一四二二)梵灯庵より『梵灯庵主返答書』を与えられ、永享五年(一四三三)の北野社法楽一日一万句には將軍足利義教一座に参加している。嘉吉三年(一四三三)以前に出家したが、文安元年(一四六〇)三月の御所での老若勝負連歌に合点するほどの名声があつた。宝徳二年(一四七〇)七月九日の飲肥邸月次連歌で発句をよんだ(康富記)が、以後は不詳。(浜千代清)

【参考文献】木藤才蔵『連歌史論考』上、昭和46年。

木 簡

文字を書くための細長い木の札。古代中国では紙の発明以前には竹や木を削って狭長な竹木片をつくり、その上に文字を書いた。これを簡とか牘とかいひ、編綴されたものを冊などと呼んだ。漢代にはその長さについて厳しい規格があり、紙の発明以後も、紙と併用されて、魏・晋時代にいたつた。日本は恐らく朝鮮半島を介して、魏・晋時代以降の簡・牘を学んだと思われるが、今日発見されている木簡で最も古いのは七世紀中葉頃のものである。専ら木を用ひ、竹簡の発見はまだ報告されていない。【出土】極めて少数であるが正倉院に伝世木簡が伝わっている。その他はすべて出土品といつてよい。戦前は僅か数点の出土木簡が知られていたが、あまり学界の注意をひかなかつた。しかるに昭和三十六年、平城宮跡から多数の木簡が出土し内容も豊かなものであつたため、いかに学界の注目をうけるようになった。以来、古代の宮殿・官衙・寺院等の跡をはじめ中世の遺跡からも木簡の出土が相つぎ、今日では全国で六十五か所から計約三万点の発掘が報告されている。七世紀中葉から十世紀に及ぶ時代のものを含むが、特に九世紀以前の木簡は史料の少ない時代の研究を補強する新史料として貴重である。【形態・機能】日本の木簡の形態は用途・機能によつて著しい差異があり、漢代の簡牘のように一定の規格はなかつたらしい。これを機能別に分類すれば、(一)文書・記録用のもの、(二)付札、(三)その他、の三つに大別できる。形態はおのづから機能によつて異なる。(一)は基本的な短冊形(一〇—二〇センチ×一五—三センチ程度)、(二)はさらに、(1)貢進物付札、(2)物品送付用荷札、(3)物品表示札、

木簡は文字を書くための細長い木の札。古代中国では紙の発明以前には竹や木を削って狭長な竹木片をつくり、その上に文字を書いた。これを簡とか牘とかいひ、編綴されたものを冊などと呼んだ。漢代にはその長さについて厳しい規格があり、紙の発明以後も、紙と併用されて、魏・晋時代にいたつた。日本は恐らく朝鮮半島を介して、魏・晋時代以降の簡・牘を学んだと思われるが、今日発見されている木簡で最も古いのは七世紀中葉頃のものである。専ら木を用ひ、竹簡の発見はまだ報告されていない。【出土】極めて少数であるが正倉院に伝世木簡が伝わっている。その他はすべて出土品といつてよい。戦前は僅か数点の出土木簡が知られていたが、あまり学界の注意をひかなかつた。しかるに昭和三十六年、平城宮跡から多数の木簡が出土し内容も豊かなものであつたため、いかに学界の注目をうけるようになった。以来、古代の宮殿・官衙・寺院等の跡をはじめ中世の遺跡からも木簡の出土が相つぎ、今日では全国で六十五か所から計約三万点の発掘が報告されている。七世紀中葉から十世紀に及ぶ時代のものを含むが、特に九世紀以前の木簡は史料の少ない時代の研究を補強する新史料として貴重である。【形態・機能】日本の木簡の形態は用途・機能によつて著しい差異があり、漢代の簡牘のように一定の規格はなかつたらしい。これを機能別に分類すれば、(一)文書・記録用のもの、(二)付札、(三)その他、の三つに大別できる。形態はおのづから機能によつて異なる。(一)は基本的な短冊形(一〇—二〇センチ×一五—三センチ程度)、(二)はさらに、(1)貢進物付札、(2)物品送付用荷札、(3)物品表示札、

の三種に細別できるが、一般に付札類は、物品に括り付けるために端に切り込みを入れたり、突き刺すために先端を尖らせた形のものが多いのが特色。このうち(1)類は貢進物を差出す地方によって形態的に地方色があり、(2)類には告知札や過所関所通過手形)に用いた長大なもの、門鑑に使った小形のもの、その他雑多な形態のものを含む。【意義】一方で紙が用いられながら木簡が用いられたのは、機能上、木製である方が有効な場合または紙を補完するためであった。木簡に書かれた文章は一枚の札で用が足りる程度の簡略なものが多く、紙に書かれたものに比べて内容豊富なものは少ないが、貢進物付札は他の史料では明らかにできない古代の収取関係に照明をあてることができ、落書・習書のなかには万葉仮名資料があり、下級官人の生活や教養を考えさせるものもある。史料の著しく稀薄な八世紀以前の木簡のなかには、国制史料として極めて貴重なものが含まれている。また、国語史の資料としても無視できないものがある。 [彌永貞三]

【参考文献】奈良国立文化財研究所『平城宮木簡(一)』藤原宮木簡 昭和44・50・53年。○阪倉篤義『国語史資料としての木簡』(『国語学』昭和44年3月)。○同『木簡の語る世界』(『言語生活』昭和46年12月)。○東野治之『平城京出土資料よりみた難波津の歌』『万葉』昭和53年9月。○弥水貞三『古代史料論—木簡』(岩波講座『日本歴史』25、昭和51年)。

尤之双紙(うよのふたじ) 二巻二冊。仮名草子。「尤草紙」とも。斎藤徳元作。なお、写本によれば、無品親王(八条宮無品中務卿智忠親王と推定される)加筆。寛永九年(一六三三)刊。書名は「枕草子」の「枕」の字の旁によ

る。【内容】『犬枕』、『仁勢物語』、『犬徒然』等と並んで仮名草子中の擬物語の範疇に属するもの。『枕草子』、『犬枕』に模し、(一)両書に洩れたことそぎて、かたはらいたき事どもをとりあつめ、此狂言となせる物(八序文)と見えるが、上下巻各四十、合計八十項目の物は尽しを収録する。『犬枕』の場合、題目内が単純な語句の羅列に終始しているが、本書では、文章体となっていて、和歌・俳諧・物語・漢籍等の引用が適宜なされ、この時代の風俗を知る上で参考になる。総じて変化に富んだ内容豊かな物は尽し集になつてゐる。【諸本】初版本のほか、寛永十一年再版本、慶安二年(一六五九)三版本、無刊記本等。再版本がよく知られている。【複製】近世文学資料類従・古俳諧編5。【翻刻】近世文学叢書7。近代日本文学大系『仮名草子集』。統群書類従33輯下。 [尾上新太郎]

【参考文献】頼原退蔵『近世文学選考』、尤の双紙(『国語国文』昭和6年11月)。○野村八良『尤の草子』(『国語国文』昭和9年11月)。○野間光辰『仮名草子の作者に関する一考察』(『国語と国文学』昭和31年8月)。

本居内遠(もとゐのちとよ) 国学者。旧姓は浜田氏。幼名は謙次郎、通称は久次郎。安次郎。弥四郎。はじめ高国・秋津と号したが、天保二年(一八三二)四十歳の時、本居大平(大平)の養子となり内遠と改めた。別号を木綿垣・榛園ともいつた。寛政四年(一七五二)二月二十三日名古屋に生まれ、安政二年(一八五〇)十月四日没、六十四歳(内遠翁略年譜稿)。【事蹟】文政元年(一八二〇)二十七歳で市岡猛彦に、同三年に本居大平に入門。のち本居家の嗣子となり紀州侯に仕え、命により「紀

伊統風土記(天保十年)を撰定し、また「新撰紀伊国名所歌集(天保十四年)をも完成して奉った。この間、国内を巡り、『伊太祁曾三神考』、『妹山背山弁』など多くの考証を著した。紀州侯の下問によって書いた『古学本教大意』や、また『賤者考』、『後奈良院御撰何曾之解』、千家尊澄との問答『和歌の浦鶴鈔』十巻その他がある。内遠の著作は、本居全集『本居春庭・大平・内遠全集』、増補本居宣長全集『本居内遠全集』に収められている。 [尾崎知光]

本居大平(もとゐのちとよ) 国学者。旧姓は稻掛氏。幼名は常松、のち茂徳・重徳・大平。通称は十歳・十太・十介。稻掛棟隆の子。本居宣長の養子となり、家督をうけて後は、本居三四衛門と称す。藤垣内(結城)翁と呼ばれた。宝曆六年(一七五七)二月十七日出生、天保四年(一八三三)九月十一日没、七十八歳(藤垣内翁略年譜)。墓は和歌山湊吹上寺。国足八十言靈大人と諡し、法号は和心院意富。必業居士という。【事蹟】十三歳の時、宣長に入門、常に宣長に近習して従学した。父棟隆も宣長の門人で『三集類韻』棟隆詠草などの著のある人である。寛政十一年(一七九九)四十四歳で宣長の養子となり、宣長の死後、享和二年(一八〇二)四十七歳で、眼疾の本居春庭に代つて本居家の名跡を嗣ぎ紀州侯に仕え、『紀伊統風土記』撰進の命を蒙るなど寵遇厚く、晩年には格禄共に大いに進んだ。なお、文化六年(一八〇七)には松阪を離れて和歌山に移住した。その性は温厚、学風もまた穏健で、本居学派の統率・経営に力をつくした。紀州侯に進講し、伊勢・松阪・京都などにも赴いて古典の講義や和歌の指導をして、国学の普及につとめ、門

人も千余人に及んだが、『神楽歌新釈』以外には特に見るべき著述を残すことができなかった。古道を論じた『古学要』もあるが、会心の著とはいえない。これは大平が仕官の身で多忙であったことにもよるが、学者としての資質が必ずしも十分でなかったためであろう。大平は、長男建正、次男清島、三男安松などを次々に失い、家庭は不幸であった。晩年、三女藤子と婚した尾張の人浜田謙次郎を養子とし、本居内遠として本居家を嗣がせ、学統を伝えた。【著作】上述以外、大平には紀行文が多い。十七歳の時の『餌袋の日記』をはじめとし、『草枕の日記』、『おかげまうでの日記』、『関のうまや』、『有馬日記』、『藤のとも花』、『名草の浜つと』、『己未紀行』その他がある。また泉居門・鈴屋門の和歌を編集した『八十浦之玉』、『鈴』があり、『藤垣内答問録』や『藤垣内文集』もある。家集は『稻葉集』という。他に『百人一首梓弓』、『万葉山常百首』、『玉銚百首解』がある。なお、本居全集『本居春庭・大平・内遠全集』と増補本居宣長全集『本居春庭・大平全集』に大平の著作がほぼ収められている。また、大平の蔵書は「本居文庫」として東京大学に保管されている。 [尾崎知光]

本居宣長(もとゐのちとよ) 国学者。もと小津氏。八代將軍徳川吉宗治政下の享保十五年(一七四〇)五月七日、伊勢国飯高郡松阪本町(現在松阪市本町)に出生。享和元年(一八〇一)九月二十九日没、七十二歳(鈴屋翁略年譜)。【名称・別称】幼名は富之助。十二歳で実名を栄貞(と)と称し、二十歳で栄貞を「ながさだ」と読み改める(日記)。別に十五、六歳の頃、貞良(と)とも称す(経籍、伊勢州飯

人も千余人に及んだが、『神楽歌新釈』以外には特に見るべき著述を残すことができなかった。古道を論じた『古学要』もあるが、会心の著とはいえない。これは大平が仕官の身で多忙であったことにもよるが、学者としての資質が必ずしも十分でなかったためであろう。大平は、長男建正、次男清島、三男安松などを次々に失い、家庭は不幸であった。晩年、三女藤子と婚した尾張の人浜田謙次郎を養子とし、本居内遠として本居家を嗣がせ、学統を伝えた。【著作】上述以外、大平には紀行文が多い。十七歳の時の『餌袋の日記』をはじめとし、『草枕の日記』、『おかげまうでの日記』、『関のうまや』、『有馬日記』、『藤のとも花』、『名草の浜つと』、『己未紀行』その他がある。また泉居門・鈴屋門の和歌を編集した『八十浦之玉』、『鈴』があり、『藤垣内答問録』や『藤垣内文集』もある。家集は『稻葉集』という。他に『百人一首梓弓』、『万葉山常百首』、『玉銚百首解』がある。なお、本居全集『本居春庭・大平・内遠全集』と増補本居宣長全集『本居春庭・大平全集』に大平の著作がほぼ収められている。また、大平の蔵書は「本居文庫」として東京大学に保管されている。 [尾崎知光]

高郡・松坂勝寛、延享元年(二五)以後同三年に至る写物・覚書の識語。通称は、十四歳で弥四郎を称したが、二十四歳で健蔵と改めた。二十歳、俳名を華風と号し日記、二十二歳頃まで用いた「狭衣考物等」の覚書・識語が、その前は華丹と称し「今井田日記」、十九歳の寛延元年(二五)に「華丹軒」と記した例を見る(都考抜書)。二十三歳の宝曆二年(二五)三月上京するや、武士としての祖先の姓である本居氏に復するが、それ以前、十九歳の頃から既に「本居栄貞」と署名した例がある(都考抜書)。宝曆三年十一月、芝蘭(ひら)と号したが(日記)、同五年三月、名を宣長と改めるとともに、号(同時に通称)を春菴(舞庵・舞庵とも書く)と改め、さらに晩年紀州侯に仕えるに及び、六十六歳の寛政七年(五五)二月、春菴を中衛と改めた。また別に石上(いしかみ)を号し(本居氏系図)、宝曆十四年夏この著と推定される「梅桜草の庵の花すまひ」には「石上散人」の署名があり、またその歌稿や歌集には「石上稿」「石上集」の名が付されている。天明二年(六三)十二月、書齋鈴屋(すず)が竣功して以後は、もっぱら鈴屋の号が用いられた(本居氏系図)。法号は十歳で英笑を号し、十九歳の時、伝譽英笑道興を授けられた(日記)。死没の前年の寛政十二年七月、「遺言書」を書き、戒名を「高岳院石上道啓居士」、後諡(ごご)を「秋津彦美豆桜根大人(あきつひこねのうぢ)」と自ら定めた。

【出自・家系】父は小津三四右衛門定利、母は松阪新町の旧家村田孫兵衛豊商の四女で勝。定利には後妻にあたる。先妻は宣長の三世の祖小津三四右衛門定治(法号唱阿)の二女清(きよ)。清には定利との間に子がなかつたので、清が前に定利の長兄小津孫右衛門某(法号元閑)に嫁して生んだ三四右衛門定治(法号道喜)が嗣子と定まっていたが、勝の腹には、宣長をはじめ、弟親次、はん・やつの妹二人が生まれた。宣長の生家は代々木綿業を営んだが、桓武平氏平頼盛六世の孫本居具(きよ)判官平建郷(たけ)を遠祖とする(と伝える)本居氏と小津氏との結合した家系である(本居氏系図)。すなわち、建郷の十三世の裔にあたる延連・武秀の兄弟は蒲生氏郷に仕えた。延連は、天正十八年(一五)氏郷が奥州会津に国替えの際、伊勢に帰国し、一志郡大阿坂村(現在松阪市大阿坂町)に住して帰農。これが本居の宗家で、代々その地の名家であったが、寛政(天十(一〇))のころ断絶したという(家系昔物語)。一方、武秀は氏郷に従い、天正十九年南部九戸(こ)の合戦に三十九歳で戦死したが、その妻は伊勢に帰国し、一志郡小津村(現在三雲村小津)の小津家の祖油屋源右衛門家に懐妊中の身を寄せ、武秀の子の七右衛門某(道印)を生んだ。この道印が、源右衛門一家とともに松阪に移って後、源右衛門の長女を娶って小津家の別家を立てたのが宣長の生まれた家で、本居武秀を祖とする。ただし、本居氏の血縁は父定利の代に絶え、宣長は純然たる小津系の出である。小津家の本家は、源右衛門の二男清兵衛末友(道運)が嗣いだ。七右衛門道印には四男二女があつたが、長男次郎右衛門宋連の業が衰えたのに対し、二男三郎右衛門道休は、江戸大伝馬町一丁目木綿店三か所を創置し、大いに富み栄え、自ら道印家の嫡家の如くになった。その後を嗣いだ養子が宣長の父定利であるが、宣長の生まれる前に後に家産が傾きかけ、父はその挽回策に努

めるうち、宣長十一歳の元文五年(二五)七月に江戸で病死、養兄定治道喜が家を相続した。宣長の先代である。しかし、定治は江戸に住み、宣長母子は翌六年松阪本町の家を引き払い、魚町一丁目の宅に移った。これは唱阿が先代道休の職人町の隠居所を移して隠居した家で、宣長が終生住むこととなった家である。宣長二十二歳の寛延四年二月、養兄定治が江戸で病没したため、同年宣長は凶らず小津家を相続した。しかし江戸店はすでになく、わずかに定治が遺産四百両の金を預け入れておいた利子を主な財源として生計を営まなければならぬ状態であった。宣長の生家は樹敬(じゆき)寺の檀家で、代々熱心な浄土宗の信者であり、宣長の家の家風をなしていた。宣長自身も十四歳の秋に「元祖田光大師御伝記」を写し、十九歳の十月、樹敬寺で五重相伝を相伝して血脈を授かったのをはじめ、その後しばしば融通念仏・十万人講等の仏事を修している。また、「栄貞詠草」(十九・二十二歳)に少なからぬ釈教歌を詠み、京都遊学中、二十六、七歳の頃に学友岩崎榮令に宛てた書簡中に「僕や不佞にして、少来甚だ仏を好む」と言っており、父母も共に熱心な信者であり、母は晩年善光寺に詣でて剃髪し、二妹も後年剃髪して尼となつている。宣長の出自・学問を考える上に、その家庭の宗教であつた浄土宗信仰の影響を無視することはできない。

【閑歴】宣長は、父定利が妻子を欲しく思ひ、子育ての神として庶民に信じられていた吉野の水心(みづこ)神社に祈願して後に生まれたので、信心深い両親に神の申し子であると信じられた。その頃、すでに家産は傾きかけていたが、上方風の商家としての教養を十分に受けて育つた。宣長は幼少から記憶力が抜群で、読書を何より好んだ。十一歳の秋に父が病没した後、弟妹と共に母一人の手で育てられたが、家は江戸の店で商業に従事していた養兄定治が嗣ぐことに定まっていたので、その将来を案じた母によつて、十九歳の寛延元年秋、同国山田(現在伊勢市)の紙商今井田氏に養子にやられたが、商売には身が入らず、読書を好み、同地の旧派歌人法幢(はつどう)和歌を学び、堂上風の歌を詠んだ。ついに寛延三年離縁して家にもどり、翌四年二十二歳で養兄定治の病死により家を相続した。しかし家産も傾いていた上に、宣長が到底商人の器でないことを見抜いた母は、医師として身を立てさせようと決意し、二十三歳の宝曆二年三月、京都に遊学させた。上京した宣長は、代々安芸広島藩に仕えた名儒堀景山の塾に止宿して漢学を学び、さらに医学を堀元厚(二六・二七歳)に、その没後は典業武川幸順(二五・二六歳)の家に止宿して医学を学んだ。景山は朱子学派に属したが、萩生徂徠と交わつて古文辞(こぶん)学にも理解をもち、他方国学にも通じて、契沖の学風を尊重していた。そのため宣長は、徂徠の新学風に啓発されるとともに、契沖の著書を次々と読んで、契沖の古典学により国学に開眼するに至つた。宣長の歌論の処女作『排庸小船(はいゆうせうせん)』が纏められたのは松阪へ帰郷して以後と考えられるが、それは上京遊学中に培われた学問思想の結実を示す青春の書であつた。宝曆七年二十八歳、松阪に帰り医師を開業するが、ますます国学の研究に励み、以後、生涯にわたつて門人を教導するとともに著述に従事した。その講義は翌八年に開講した「源氏物語」をはじめ

め、『古今和歌集』『新古今和歌集』『伊勢物語』『日本書紀』(神代紀)など多くにわたったが、特に『源氏物語』は四回、『万葉集』は三回も続けられた。この間、三十一歳の宝曆十年九月、松阪の村田氏の女みかを娶ったが、同十二月離縁。同十二年正月、同国安濃郡津(現在津市)の草深氏の女たみ(結婚後に勝子と改名、堀景山門の学友であった草深母立(玄光)の妹)を娶り、翌十三年二月には長子本居春庭が生まれた。同年五月には、味読するに従って次第に敬慕していた『冠辞考』の著者賀茂真淵が、大和旅行の帰路、伊勢に参宮して松阪の旅宿新上屋に宿泊したのを訪ねて対面を遂げた。かくして『古事記』研究の志を固め、同年十二月入門許諾の通知を受け、翌十四年正月、入門誓紙を送って正式入門した。以後、真淵との間に『万葉集』について書面による質疑応答を始めるとともに、『古事記伝』述作の準備に着手するに至った。その前年、宝曆十三年六月には既に『紫文要領』が成り、次いで『石上私淑言(いさかひのまことことば)』もほぼ成稿していたと考えられ、『もののははれ』の説を中心とする中古学はほぼその骨格を完成していたが、真淵入門以後は、『古事記』を中心とする上古学に主力が傾注されるに至ったのである。『古事記伝』の総論に当る巻一・巻二の最初の草稿と見られる『古事記雑考』は明和四年(一七六五)以前の成立と考えられるが、起筆年時は不明である。明和元年(一七六〇)には既にその準備が始められたものと考えられるが、『古事記』本文の注釈を執筆し始めたのは、明和四年五月九日であった(天理図書館蔵『古事記伝』巻三奥書)。安永七年(一七九六)閏七月には『古事記』

政五年正月には中巻の伝、即ち巻三十四まで成立し、同年六月に至って、この生涯の大著全四十四巻を完成、同年九月には鈴屋で完成祝賀会を催した。その間、文学・語学・古道にわたって、『手枕(てまくら)』(宝曆十三年以前成立)、『手向草(てまうくさ)』(天明二年編)、『神代正語(かみしろ)』(寛政元年成立)、『玉勝間(たまがましま)』(同五年起筆)、『玉あられ』(同三年成立)など多くの著述が成った。門人は安永八年までは伊勢国人に限られていたが、翌九年以後は他国からも入門者があり、全国的に分布し、安永二年には四百五十名を越えなかつた門人が、没年当時には五百名を越えるに至った(授業門人姓名録)。このように盛名は年と共にあがり、天明七年には松阪をも領した紀伊藩主徳川治貞(一七六一-一八二六)に、治道経世上の意見を記した『玉くしげ』二巻(宣長没後『秘本玉くしげ』として刊)に別巻一卷(『玉くしげ』として寛政元年刊)を添えて献上した。寛政四年冬には加賀藩主前田治脩(まへだのちしゆ)『毛草(け)』(一七九二)から招聘の話がおこったが、宣長は他国移住を望まず、沙汰止みとなった。しかるに、同年十二月、引続き徳川治貞の嗣紀伊藩主徳川治宝(とくがわのちほう)『毛草(け)』(一七九二)に招かれ、松阪居住のまま五人扶持で召し抱えられることになった。このような社会活動に伴って、この頃から旅行することが多くなり、明和九年の吉野旅行に『言筈日記(ことばはかり)』を執筆して以後は絶えていた紀行の筆も執り、寛政五年には上京して『結びすてたる枕の草(つむぎ)』、同六年には紀州侯の召しよって和歌山に赴き、『紀美のめぐみ』が成っている。同年十一月、藩主徳川治宝に講義をし、十人扶持御針匠格に昇進した。同十二月には松阪の医師総代と連署して同地に学問所建設を

出願したが成功せず終った。しかし、この年から翌七年正月にかけて長子春庭が完全に失明するという悲運をも経験している。寛政十一年正月には、再度和歌山へ赴いて講義をし、帰途吉野の水神社に参詣して二月末に帰宅した。翌十二年(一七九一)の七月には詳細な『遺言書』を記し、山室村(現在松阪市山室町)の妙楽寺の山に墓地を定め、没後のことを詳細に指示した。同年の暮から翌十三年(享和元年)の春にかけて召しよって三度と歌山に赴いて講義、二月には奥医師に列せられた。同三月一日に帰宅したが、その月末から最後の京都遊行に出かけた。滞在約七十日に及び、門人のほか、公卿の来聴者も多かった。公卿中の名家中山家に招かれて、尊号宣下事件で有名な愛親(あいの)の子権大納言中山忠尹(なかつら)『毛草(け)』(一七九二)等の公卿に講義した。また小沢庵庵(おさわ)・伴蒿(ばんこう)・賀茂季鷹(かものせいてい)・香川景樹らと対面するなど、国学の普及に大きな成果を収めて、同六月帰宅した。しかし、同年九月病床につき、病臥十日で、九月二十九日七十二歳をもって没した。没後は、実子春庭が盲目のため、養子本居大平が跡を嗣いで紀州侯に仕えた。

【学風・著作】宣長はその学問論『うひ山ぶみ』において、当時の国学を、神学・有職の学・歴史の学・歌学の四に分類したが、宣長の学問はそれらのすべてを含んで広汎である。宣長の学問は、古代を対象として、自ら『古学』と規定するとともに、その中心に『道の学問』を置き、『古事記』を中心として日本独自の道としての古道を明らかにすることを眼目とした。それを達成するためには古語の実証的研究を通じて古典があるがままの様相において究明しなければなら

ず、また中古の和歌・物語の研究によって風雅を解することが、古道を真に理解するために不可欠であった。そのため、宣長の国学は哲学的な思想として体系化されることは少なく、注釈の形を採り、またその古道は他者との論争を通じて主張されることが多かった。しかし、それは旧来の注釈家のような無思想の注釈、もしくは単なる主観的主張を事としたことを意味せず、その訓詁注釈に見られる精密な分析は、それを総合することによって、研究対象としての日本古典の本質を全体として捉えようとする一貫した方法によって貫かれていた。その意味で、吉川幸次郎によって「思想を思想という形では主張することを欲しない思想家と評されたのも、決して故無きことではない。『古事記伝』をはじめとする宣長の学問が注釈という方法を探りつつ、単なる注釈の域を越えるのは、注釈の目的が、言語・文学と思想との関係についての深い思索によって裏打ちされた学問的行動として存在したからである。したがってその学問を現代の科学の立場から分類することは必ずしも容易でないが、その対象と目的に従って、ほぼ文学説・語学説・古道説の三に分けて考察することが可能であろう。年代的に見ると、まず文学説が成立し、次いで語学説の深化発展を経て古道説に到達したと言えるが、それらは互いに関連しつつ宣長学の全体を構成している。

【文学説】三十四歳の頃に成った『紫文要領』と『石上私淑言』の二著によって代表される。宣長はまず『源氏物語』作者の物語観から帰納して、物語が教戒を目的とする儒仏の書とは異質のものであることを明らかにして、その本意は「もののははれ」を知ら